



2008年7月6日

いま起きつつあること…

高橋哲哉さんの
平和講演会から



その
5

引きつづき、高橋哲哉先生のお話の要旨を紹介しします(次号で終わる予定です)。

戦争に反対した ひとりの人

先生は、講演の最後に戦時中に『暗黒日記』を著した清沢冽という人を紹介されました。この人は、戦前にリベリズムの立場から軍国主義反対を唱え、戦時中は言論弾圧が激しくなって公に発言ができなくなつて、代わりに日記で自分の考えを書いてい

ました。彼は、戦争はまったくおろかな選択で、日本は必ず惨憺たる犠牲をもって敗北に終わるだろうと見通していました。そしてもし戦争が終わって自分が生き延びることができたら、自分は戦争を絶滅するために残りの人生を捧げようと考えていた人です。彼は残念ながら1945年に敗戦を待たずに亡くなつていますが、彼が亡くなつた1945年、敗戦の年の1月1日の日記を紹介したいと思います(以下、橋川文三編『暗黒日記』3、ちくま学芸文庫からの引用)。

『暗黒日記』から

〈昨夜から今晩にかけて三回空襲警報なる。焼夷弾を落としたりたところもある。一晩中寝られない有様だ。僕の如きは構わず眠ってしまつが、それにしては危ない。配給のお餅を食つて、お目出度うをいうと

矢張り新年らしくなる。曇天。日本国民は今、初めて「戦争を経験している。戦争は文化の母だとか「百年戦争」だとかいつて戦争を讚美してきたのは長いことだった。僕が迫害されたのは「反戦主義」だという理由からであった。戦争は、そんなに遊山に行くようなものなのか。それを今、彼等は味わっているのだ。だが、それでも彼等が、ほんとに戦争に懲りるかどうかは疑問だ。結果はむしろ反対なのではないかと思う。彼等は第一、戦争は不可避なものだと考えている。第二に彼等は戦争の英雄的であることに酔う。第三に彼等は国際的知識がない。知識の欠乏は驚くべきものがある。

日本国民は初めて戦争を経験している

彼は、日本国民は今、戦争を初めて経験していると言っています。これはどういふことでしょうか。1945年です。それから、もうすでに戦争が始まつて5年目です。満州事変から数えるともう15年、日清戦争を含めればもうずっと戦争をしてきているのです。

この「戦争」を「戦場」と置き換えると意味が分かると思います。長い戦争の時代、日本国民のほとんどは戦場を経験したことがないのです。なぜなら日本の軍隊は常に日本の外で戦つて来たから。日



2008年7月6日

いま起きつつあること…

本が攻め込まれたことはこの時点ではなく、国民のほとんどは戦場を知らなかった。そういう中で、負けても勝ったと言われる報道がなされる中で、国内では勇ましい言論が

支配していました。戦争は文化を生み出す母だとか、百年戦争を戦えるとか……。自分たちは戦場に出ませんから、日本は勝った、勝ったと言つて、戦争讚美の言説が支配的だった。そういう中で清沢は反戦主義だと言つて迫害された。ところが今、国民は自分たちの頭の上から爆弾が降ってきて、逃げ惑う経験をしている。初めて戦場を経験している。

一見、平和な日常の中で日本はすでに戦争に踏み込んでいっているのではないかと最初に申し上げましたが、まさに一見平和な日常が国内で続いている。それでも国家が戦争を行ない、人を殺すことに加担していることがあるというので

す。かつてもそうだったということを、私たちは真剣に考え直す必要があるのです。

清沢の予言が 当たらないために

清沢は、日本国民が初めて戦争を知り始めていると言いつつながら、それでも国民が本当に戦争に懲りるかどうかが疑問だという不気味な予言をしています。理由は3つある。これらの理由はいずれも、現在でも成り立ちそうな理由です。戦争は避けられないと考える人がどうも増えているようなので、それで9条が危うくなっている。戦争が英雄的であることに酔つ。先ほどの

安倍元首相の文章なんかは、気高く美しい死などと言つて戦争を美化している。そういう言説がどんどんと語られるようになっていく。国際的知識がないというのは、さすがに昔と今は違つと思います。が、それでも靖国神社に首相

が参拝したときに、なぜ中国や韓国の人たちが怒るのか理解できない。そういう人が増えている。

こういう条件が重なり合つて、また戦争に導かれてしまいかも知れない。日本人は懲りないのではないかとこのことを、敗戦の年の元日に、空襲警報の下で、軍国主義に徹底して反対した清沢が書いていたということを私たちは肝に銘じる必要があるのではないのでしょうか。

清沢の予言は、「当分は戦争を嫌う気持ちが起ころうから」というところは間違いない。敗戦後の日本人はもう戦争はもう懲り懲りだと、大方の人は思った。だから平和憲法を完成したということだったのですが、そういう厭戦の感情が社会的に共有されているうちに、正しい教育をしなくてはならない。つまり戦争を避ける、平和の教育をしなく

てはならないと清沢は考えていた。私たちは、これらのことが十分になされてきたのでしょうか……。

清沢は敗戦を待たずに死んでしまったわけですが、清沢の不気味な予言が二度と的中しないように、私たちは今日お話ししたような流れに対して、有効な声を挙げていく必要があるのではないかと思います——と言つて、高橋先生は講演を終えられました。

◆ 私たちは、これから憲法9条改訂が問題になり、もしそれが実現してしまうと、ギリギリのところ、戦争に加担するかどうか問われる状態になります。そのとき、私たちはどこまで平和ということに固執することができるのか、それは日本人のキリスト者である私たちひとりひとりが問われることなのだと思わされました。